



筑紫女学園大学リポジット

Observation of Northern Persia by the Journalist Ohba Kakoh in the Meiji Era

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-11-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大津, 忠彦, OHTSU, Tadahiko メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/523

明治期大庭柯公のペルシア北部紀行

大 津 忠 彦

Observation of Northern Persia by the Journalist Ohba Kakoh in the Meiji Era

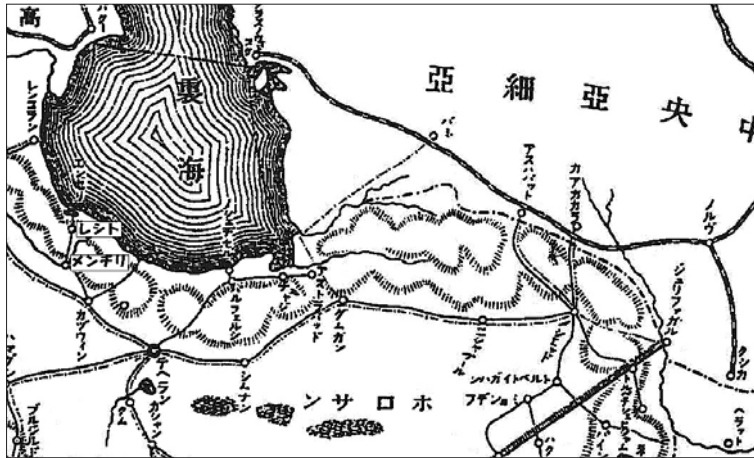
Tadahiko OHTSU

はじめに——大庭柯公の旅概略

筆者はこれまでに、近代（明治期）における日本（人）の西アジア理解、とりわけイラン（ペルシア）現地体験の様態について、その幾例かを採りあげてきた⁽¹⁾。このたび検討対象の資料とするのは大庭柯公（景秋、1872〔明治5〕～1921〔大正10〕？年）が著した『南北四萬哩』（1911〔明治44〕年6月12日発行、政教社）である。資料底本としては「国立国会図書館近代デジタルライブラリー」が公開するデジタル化資料に依った。

「明治・大正期のジャーナリスト⁽²⁾」と評される大庭柯公は、1910（明治43）年、「大阪毎日」新聞記者として外遊。この時の旅行記が『南北四萬哩』であり、当該書の記すところによればその旅程の概略は以下の如くである（固有名詞〔地名〕のカタカナ表記は原文通り）：

- 3月15日 日本発（軍艦「生駒」横須賀抜錨）
 - 27日 シンガポール入港
 - 29日 午後2時抜錨
- 4月1日 インド洋に入る
 - 3日 赤道通過
 - 11日 ボートルイ（モーリシャス島）上陸
 - 16日 マダガスカル島東南岸沖
 - 22日 アグラス岬（アフリカ大陸南端、これより大西洋に入る）沖通過、テーベルベイに入る
- 5月7日 大西洋上
 - 4日 採炭のためカナリー島（スペイン領）寄泊



大庭柯公ペルシア旅程図（『南北四萬哩』所収図版よりその一部を拡大、レシト、メンチリは加筆）

- 6月10日 リオデジャネイロ入港
- 8月25日 西欧より露都に着く
- 9月20日 バクー着、当地1泊
 - 21日 夕刻バクー発
 - 22日 午後4時「レンコラン港に望む」
 - 23日？ 午後3時エンゼリ港着
 - 24日？ レシト着
 - 25日 早朝レシト発
- 30日 テヘラン発メシエジセル港（裏海東南岸）行：「マザンデランの三日半」
- 10月3日 アムーリ市經由バルフエルーシ市着、当地泊
 - 4日 早朝バルフエルーシ市発、正午にメシエジセル港着、夕刻クラスノウオドスク行汽船の客、以後中亞へ
 - 7日 クラスノウオドスク着、爾後、メルヴ、ブハラ、サマルカンド
 - 10日 朝タシケント駅着
 - 13日 オレンブルグ駅着
- 10月27日 帰国
 - 29日 軍艦「生駒」帰朝

I. 『南北四萬哩』における「波斯遊記」

筆者が注視したいことのひとつは、この7ヵ月半におよぶ大庭柯公の外遊のうち、ペルシア滞在期間（9月23日？エンゼリ港着より10月4日メシエジセル港着まで）は実質10日間ほどにすぎないながらも、旅行記『南北四萬哩』において「波斯（ペルシア）」に関する記述は176頁から274

頁まで、すなわち全体344頁のほぼ3分の一近くとその占める割合がたいへん大きく、しかも記述内容は実に多岐にわたっていることである（以下目次に拠る）：

p. 176	波斯遊記	p. 216	一五 首都に入る
p. 176	一 波斯の現状	p. 218	一六 獅陽國の首都
p. 180	二 獨逸の活躍	p. 221	一七 人口と種族
p. 184	三 露國の勢力	p. 225	一八 波斯の婦人（上）
p. 187	四 在露波斯公使との會見	p. 227	一九 波斯の婦人（中）
p. 191	五 裏海沿岸の秋	p. 229	二〇 波斯の婦人（下）
p. 193	六 裏海々上の人（上）	p. 232	二一 内外公館の模様
p. 195	七 裏海々上の人（下）	p. 236	二二 列強と鐵道經營
p. 198	八 檢疫の難關	p. 239	二三 波斯の宗教界（上）
p. 201	九 エンゼリ港	p. 241	二四 波斯の宗教界（下）
p. 203	一〇 北境の三街道	p. 244	二五 貿易關係
p. 206	一一 テヘラン街道（上）	p. 246	二六 波斯より中亞（上）
p. 209	一二 テヘラン街道（中）	p. 249	二七 波斯より中亞（下）
p. 211	一三 テヘラン街道（下）	p. 252	（遊記終）波斯の交通と列強（明治
p. 213	一四 宿舍の朝夕		四十四年一月「外交時報」所載）

また、筆者がこれまでみてきた明治期先覚者の「ペルシアレポート」の殆どがいずれもペルシア湾の港市から内陸行へと出発し、暑熱・乾燥のなかをテヘラン目指して北上する道程に沿って記述されている事とは、『南北四萬哩』の場合そのルートが異なることである。すなわち大庭柯公はロシア（露国）領カスピ海港市（バクーおよび「レンコラン」）を經由して「エンゼリ港」よりペルシア入国をはたす。以後陸路を「レシト」、「メンヂリ」、「カゾウイン」経由に取りテヘラン入京。そののちは、こんにちのギーラーン、マーザンダーラーン、ゴルガーン各州域を出国へのルートとしている。すなわち大庭柯公のペルシア滞在看聞対象域は北部ペルシアに限定していることになる。本稿では、『南北四萬哩』所収「波斯遊記」を再読し、従前通りの視点でペルシア踏査先覚者のひとり大庭柯公によるおもにペルシアの自然、習俗観察等およびその受け止め方を検討対象とする。

『南北四萬哩』所収のうちこの「波斯遊記」が比較的詳細に著わすところは、欧米とくにイギリス、ドイツとロシア影響下にある当時のペルシア情勢ながら、そのような国際政治力学を受容せしめた基層とでもいうべきペルシアの歴史、文化、風土についてはなお一層の理解が必要であるとする大庭柯公の気概が確かにある：

「波斯は必しも邦人未踏の地ならざるも而も未知の國と言ひ得べし（傍点省略、引用者註）、僅に其一端を見舞ひ、僅に其一角を踏みたるの邦人すら未だ三四人を出でず、邦人の波斯に關する智識の極めて幼稚なる知るべきのみ」（176頁）。

当時わが国にとってほとんど未知の疆域然たる北部ペルシア／カスピ海南岸域。そこは地勢上、西アジアにあって実は独特の自然情景、人々の営み具合を呈する。筆者はこれまでの遺跡調査等で久しく慣れ親しんだ地域だけに一層興味を覚えるのであるが、当時の日本人訪問者にはそれらが一体どのように映ったのであろうか？ペルシアの自然・風土などは「ジャーナリスト」大庭柯公の訪問意図からは、あるいは直載の対象ではなかったであろうとも考えられる。しかし、副次的関心事でありながら敢えて記録・報文化されたところにこそ、少なくとも当時の日本人にとって「西アジア的」と捉えられたにちがいない事柄が含まれると筆者は推察したい。旅程のどこで、実際に何を、どのように観察・認知したであろうか。『南北四萬哩』所収「波斯遊記」には、大庭柯公が現地で実見・実体感したままの事柄と、そうではない事柄（恐らく文献等より、あるいは伝聞）とが混然として記載されている。したがって、真に実見、実感した「現地報告」部分を、そうではない記述部分から区分して読み進む必要があろう。日本人のイラン（ペルシア）理解が、現地体験からどのように醸成されていったかを検討する上での対象資料のひとつとして、以下、「波斯遊記」中に読み取り得る該当部分を集成し、それらを■付引用文で記し検討することとする。なお、■付引用文には、便宜上その内容を見出し的に《 》内に記す。

Ⅱ. 大庭柯公が記すペルシア旅程での実見・実体感諸事

大庭柯公がバクーよりレンコラン経由でエンゼリ港^③よりペルシア入国を果たした9月下旬、当地の気温・湿度は、筆者の現地体験から判断して、比較的穏やかな時候期であったはずである。そのなかを、爾後、ギーラーン州内旅程よりペルシア紀行が始まる：「予は上陸後土語「モルド、アブ（死水の意）の沼澤然たる地を経ピル、バザル^④河を横りて馬車にて直にレシト^⑤市に向ふ、（中略）エンゼリ港背後二里餘のピル、バザル村よりレシト市へは我里程にて尙約二里もあるべし」（203頁）。

■《米田、桑田、煙草畑》通路廣濶にして平坦、兩側遠く米田、桑田および煙草の畑を望む、（203頁）

カスピ海からこんにちのギーラーン州域内へ上陸入国を果たしたためであろうか、ペルシア湾より入国し先ず酷暑乾燥氣候を辟易するほど体感したのちにギーラーン州特有の「米田、桑田」等を実見した、たとえば吉田正春、古川宣譽等先人たちと比して、その現地風景のはじめての受け止め方には、後述にもみられるように、比較的淡々としたところがあるようである^⑥。もっとも、北部ペルシアの地では、隣接する大国「露国」やドイツ等の影響下の関係実態こそが大庭柯公にとって先ず強調されるべきであったらしいことは、「波斯遊記」が「波斯の現状」、「獨逸の活躍」、「露國の勢力」に関する詳述に始まることから首肯されるところであり、その意味では当然の差異なのかもしれない。

入国審査、通関に限られた日にちが浪費されることを危惧しながらも、巧みに事を済ませたの

ちは、9月25日早朝、レシト市を出発し、いわゆる「露國式の二頭立馬車」にてテヘランを目指す。その道程「テヘラン街道」沿については下記のような観察事項を記している。

■《村落、家屋》波斯の小村落は宛然滿洲の小村落なり、テヘラン街道の車站は滿洲北部小村落の商人宿を知るものゝ容易に想像し得る所なり、その土壁を圍らせる、その陋屋の塀内に擴げられたる、予は幾度か日露戦前の齊々哈爾(=チチハル、引用者註)、阿什城の遊を憶ひ出でたり。(208頁)

■《気温》日中八十五六度(=約30℃、引用者註)、に達したる暑氣は五時を過ぐるの頃より頓に冷却して點灯後の馬車の上は六十度(=約16℃、引用者註)にも及びたらん如く感ずるに(208頁)

■《桑畑》レシトより首都に通ずるテヘラン街道一日行程の邊には桑畑相連りて際涯なき場所多し(209頁)

■《菜園、米田、烟草畑、巨木樹林》桑樹林以外菜園、米田および烟草畑相連り、更に山地に近き處には各種の良樹鬱然林を為し松杉の類に至りては往々にして巨木老幹を見る(209頁)

旅程：「今夕我馬車の止宿せんとする車站はレシトの南方約十九里なるメンヂリ市南方約一里の驛站なり」(210頁)

■《民家》メンヂリ⁽⁷⁾には土壁に圍まれたる土屋の八十戸もあらんか、通路二三條、小川の通路に沿ふて流るゝもの自然の溝渠を為し、村民の出でゝこゝに物洗ふを見る、不潔なる限なり。(210頁)

■《森林南限》森林帯はメンヂリ附近にて漸く畫き、これより以南多くは平野を見る。(211頁)

■《家屋》東站宿舎の模様(中略)荒壁造の矮屋は恰も滿洲邊の民家に似たり(中略)露西亞名物湯沸の此處に備へらるゝは(後略)(211頁)

■《止宿處の夜食》夜食は半熟の鶏卵五個、羊肉の小片に切りて煮たる少々支那式に類するもの一皿なり(212頁)

■《飲酒》彼等の飲料は通常の葡萄酒と日本酒の少々濁を帶たるものゝ二種にして前者は輸入に属し後者は波斯固有の酒料なりといふ(215頁)

■《阿片吸引》傍に目を轉じて予の一驚を喫したるは阿片吸引器の點火せられたるものありし一事なり波人に阿片吸引の習俗あるを知らざりし予は(中略)その煙管は支那人のそれよりも長く又支那人の如く必ずしも横臥して吸飲するにも非ざるが如し(215頁)

■《朝の礼拝》室内に低微にして單調なる聲の聞え、(中略)經二寸許なる六角形の小器片⁽⁸⁾を取出し之を座前に置くや恭しく頭額を下げて其器片にまで接觸すること少時、叩頭したま祈禱するもの幾度なるを知らず。(215-216頁)

旅程：「第二日の午前アガババ驛⁽⁹⁾を過ぐ」(216頁)

■《果樹園》アガババは(中略)自然に高地なれど土地肥え水利に富み、葡萄その他の果樹園多

し（216頁）

旅程：「第二日を通過したるカヅウイン市⁽¹⁰⁾は（中略）エンゼリ、テヘラン街道上第一の土地なり特に兩地點間の殆ど中間に位するが故に（後略）」（216頁）

■《露西亞品》馬車のカヅウインに入るや暫く街上を散歩見物せるに、店頭陳列する處大半は露西亞品なり食器類より砂糖、更紗の如き皆露國よりの輸入品なり（217頁）

旅程は「レシト出發後第四日の午後首都に入らんとする」、「午後四時馬車テヘランに入る」（217頁）。テヘランについては、「城門」が12あり、「支那各城市」のそれらより美しさ、技巧において優ると観ている：

■《裝飾タイル》波斯の城門が此彩石によりて其表面を飾られ⁽¹¹⁾門側高く聳ゆる圓塔の如き深緑、淡紅、黄色の光澤ある彩色によりて彫鏤せられ諸種の紋様を織出せるもの眞に一種のモザイクなり（218頁）

■《テヘラン市中の通路》市街に足を入れたるに通路甚だ狭く兩側は一面に土塀の路に沿ふて相聯れるを見るのみ（中略）テヘラン市内を通過する數町にして早く其の我國の土族屋敷との類似を會得したり（218頁）

市街中心地は、「朝鮮京城」を彷彿とさせるとの印象を述べ、「宮城」前広場中央に「小花園」を伴う「羅馬風の泉水」、「四門の巨砲」および「大小の青銅砲十數門」のほか、兵營、郵便局、「英國銀行」（国立銀行）、東印度電信會社等の有ることを描述している（220頁）。

テヘランにおいて「奇觀」、「偉觀」と受け取った事項をそれぞれ特記している。前者は婦人の身なりについて、後者は「市場」（いわゆる「バーザール」）についてである。

■《婦人の身なり》初めてテヘランを見たる予に取りて奇觀なるは街上の婦人なり、彼等の多くは西洋のショールに類する荒縞の綿布を被衣の如く頭部より被りて全身を包み、馬の尾にて編みたる黑色の面布にて全く面部を隠蔽す⁽¹²⁾、近寄て彼等に接するも更に婦人の容色を窺ふに由なし（220頁）

■《バーザール》テヘラン市中最大の偉觀は廣場の南方なる市場の壯大整備せることなり、（中略）鍛冶屋の鐵槌の響、呉服屋、八百屋商の客を呼ぶ叫び、混然一時に到りて（中略）案内者を伴はざる外人のために一大迷宮たるテヘランの市場は眞個外來人のために至大なる珍世界なり（220頁）

こののち「波斯遊記」は「人口と種族」を著し、特に民族に関しては、クルド族のある種族が「全然波斯政府を認めずして租税兵役すら拒否する」事、あるいはトルコ「韃靼族」の離反問題等に言及している。そして「波斯の婦人」の章上・下が続く。そこでは「十數日の波斯巡遊中波斯婦人の面貌を窺ひ得たること一回だもあらず、」と明記し、これらの章の実質内容は「多妻制」

(228頁) やこれに関わる民家構造等々に顕示されるイスラム下における「壓迫、卑下を一身に集むる波斯の婦人」(230頁)、「幽囚的生活」(231頁)を強調するも、非常時における婦人の勇猛さや皇妃の狡猾な行動等々に拠って、「教典上の舊俗を破壊して自由の天地を迎へんと煩悶する」(231頁)「是等の見地より外人の唱説と相待ちて一面に熱烈なる性情を有する波斯婦人の教儀と面布の撤去を絶叫するの日も或は遠からずして到るべきか」(232頁)と結んでいる。

章「二一 内外公館の模様」より：

これは「波斯の官省内における執務の實況一見せん」との目的で、宮城内に外務省書記官を訪れた際の実見記。

■《刀筆之吏の執務風景》一廣間に絨氈の敷かれて、所謂刀筆吏十餘名ほどの日本流に正座して床几たる輕便式の小机に凭り、波斯固有の蘆の筆を飛ばせてパチルス然たる亞拉比亞文字を認めつゝあり。封建時代における吾等祖先の執務振も想はれて感興少からざりき (234頁)。

なお、これについては「波斯内務省内執務の狀」(235頁)との説明文を付した図版がともなう。こののち、英国公使館および露国公使館を訪れ、後者においてはその館内にある「公開の施療室」(235頁)を実見しているようである。

官庁に関しての後には、新聞社訪問での「失望したり」(236頁)との所感記述が続く：

■《新聞社編集室》編輯局とも稱すべき室内に机上新波斯人の常食たる羊肉に乳を混じたる米飯と土耳其より輸入せられたる教典の所謂御冷水とを盛りて執務中假食を為すもののあるを見るも、彼等の手に成る新聞が如何の價値を有するやは想像に餘あるなり。(236頁)

章「二二 列強と鐵道經營」より：

■《鐵道未整備》波斯人の予に遇ふものゝ予に向つて必ず問ふことは日本に鐵道ありや、如何なる延長を有するやの一事にして、彼等は其度毎に自國が鐵道を有せざることを耻づるの色歴々たり。(236頁)

「英露の激烈なる反對」(237頁)、「英國の反抗」(238頁)、「露國の反對」(238頁)、「露國の有力者側より反對の聲」(238頁)、「露國內一部人士の反抗の犠牲」(238頁)等々により、波斯国内における鐵道敷設のままならぬこれまでの状況を強調している。

章「二三 波斯の宗教界(上)」より：

■《「寺院内の學校」(239頁)》石床に疊様のものを敷き、十一二歳の兒童十五六人圓座を作りて讀書中なり。兒童の間に交り居たる有髯者は予の入來れるを見て、兒童に對して一二語を加へたれば、或は踞座し或は端座しゐたる十數の兒童は我勝にと立上りて予に禮拜したり (239頁)

■《「寺子屋式教室」(240頁)》波斯固有の學校なるものが我國維新前の寺子屋に比して更に數を下れるものなるを看取し得たり。(240頁)

■《意味を解せずコーラン誦誦》予は（中略）亦兩三度僧侶の讀經を聽きたるが、その度毎に彼等に對してコーランの意を解し得るや否やを質したるに、彼等は臆面もなく其單に鸚鵡流に誦誦するに過ずして、毫も讀經の意を解し得ざる旨を答ふるの常なり（241頁）

章「二四 波斯の宗教界（下）」より：

ここでは、「儀式に流れ」、そして「僧侶が殆ど公然短期妻の斡旋を業とする」（242頁）僧侶の「墮落の極」（242頁）ぶり、例えば「媒酌僧への報酬は四五トウマンを要す」（243頁）、あるいは「北部地方における村人農民の間には僧侶又は官吏を尊ぶの餘、美貌の少女を有するもの、如き好んで其娘を短期妻として僧侶に献じ（後略）」（243頁）等々を記している。この因習・旧態に対し「近時富家の子弟が頻々として佛、英、露國に留學し、その歸り來れるもの歐洲思想の一端を傳ふるより、その勢の寺院學校内にまで傳播して革命的氣風を醸成せるなり」（244頁）、「ハルデイ、アルメヤン族の家庭に於てその子弟を好んで英國宣教師の許に托する」（244頁）等を「注目すべき變化」（243頁）と捉えている。

章「二五 貿易關係」より：

ポルトガル、オランダ、あるいは「ヴェニス人」、「アルメニヤ人」が有力貿易相手であった歴史は、対英・露の優勢下を取って代られ、さらには「最近獨逸の貿易界に亂入し來りて英露の對波通商に變象を與へんとしつゝある」（245頁）現状、ならびに、農業国輸出要品として「乾葡萄」、「波斯毛氈」に言及している。

章「二六 波斯より中亞（上）」より：

「九月三十日朝波斯の首都テヘランを出發して裏海の東岸なる中亞鐵道の最西端港に向はんとする予は途をマザンデラン地方に取りてメシエジェル港⁽¹³⁾に到らんとす」（246頁）。テヘランより「メルブ」まで10日間の旅程うち、10月4日正午にメシエジェル港到着までの5日間の、經由地に関わる描述が再開する。特に、「マザンデラン地方」では、綿花栽培に見られる「豊富なる生産力」（246頁）地域であることと共に、「高岳」、「谿流」、「斷崖」、「原野」等々変化に富む地形の妙からなる「好風景」（246頁）ぶりやその植生が注視されている。

■《野原、森林の点在》原頭林地の處々に點在するもの、枯草の芝氈上濃綠色の斑點を劃するに似たり（247頁）

■《草木の密生》樹林の鬱茂たるに會ひ或は竹叢、藤叢の密生するを見る。（中略）時に丈草の肩を没するあり（247頁）

■《柑橘類》特に此地方の産物として柑橘類各種到る處に培養せられて、（247頁）

■《河川と粗製橋梁》マザンデラン地方は極めて河流に富む、大小の急流皆濁水にして（後略）幾多の橋梁皆村人の假工に似て、馬上の予をして幾度か心膽を寒からしめたり（248頁）

■《樹木の繁茂、日本の地方風情に類似した趣》沿道の一帯樹林に富み、竹叢を見暮色漸く到る

時蛙聲の閣々を水邊に聽き、陋屋の夕炊烟細く上る時、蚊の來襲に悩まざるゝが如き、予をして我國地方旅行の趣を感じしむ（248頁）

住人について、その氣質をテヘランや「西北地方」（249頁）のそれと比較し快活で活気があると評するとともに、とくにマザンデラン地方女性の優等性等を記している：

■《高い背丈と美貌》女子の丈高く頑健にして而も美貌に富む（249頁）

■《顔を隠覆しない》此邊の婦女一般に覆面を用ひず、稀に之を用ふるものゝ如きも僅かに鼻梁の半より唇頭を覆ふに過ぎず（249頁）

マザンデラン地方旅程は、「首都出發後第四日の朝」（249頁）アムーリ市⁽¹⁴⁾に到る：

■《天幕》アムーリ市に入らんとして其邊一面の廣野に點在する丘陵、樹林を利用して天幕の接比するを見る（249頁）

■《アムーリ市遠望》市に近づきヘラスブ川邊を立ちて展望するに、先ず眼に入るものは回教寺院の尖塔の高く聳ゆるあり、白堊の小舎あり、藁葺の陋屋あり（249－250頁）

■《店舗形態》市の中央に入れば（中略）テヘラン流の高塀式住宅にあらずして此の如き解放せる店舗を見る（250頁）

旅程ではアムーリ市には留まることなく進み行き、同日夕刻、バルフェルーシ市⁽¹⁵⁾に至っている：「アムーリ市より土民常用の馬車に由りて薄暮バ市に着したるの予は第四日の夜を此地の一旅宿に過せり」（251頁）。そして「十月四日早天バルフェルーシ市を發し、」（251頁）との後述に拠れば、バルフェルーシ市到着日、すなわち、アムーリ市出発日は10月3日となる。なお、これら二市を有するマザンデラン地方は「北部波斯一帯中最富の地方」（251頁）であり、「綿花」、「波斯米」、「カナフ（波斯麻）」、「鉄」、「石炭」の産出、また、バルフェルーシ市には、「裏海岸に向かつて舟楫の便ある」事をその富の要因と観ている。

■《川辺の小禽》バルフェルーシ市も亦⁽¹⁶⁾バブーリ河畔に立つ、（中略）バブーリ河の兩岸林業に富み綠翠水に映ずる處小禽の夕照を浴びて群り囀るなど索漠たる波斯にありては殆ど復見難きの景なり（251頁）

■《密林、人家相接》バルフェルーシ市に近づくに従ひ林叢漸く密林となり、人家亦相接比し來る（251頁）

Ⅲ．ペルシア北部描写の二重性

筆者は、先に言及したごとく、イラン北部カスピ海に接するギーラーン、マーザンダーラーン、ゴルガン各州を久しく考古学研究上のフィールドワーク対象要所のひとつとし、これら諸地域を幾度となく訪れた⁽¹⁷⁾。そして筆者や筆者四周の研究者もまたカスピ海南岸域風土の特性、すな

わち西アジアに在って特異ともいふべきその湿潤性が生み出す景観やそこに育まれた文化・風土にある種の驚嘆を覚え、例えば次のように捉えた：

- ・「イラン高原北辺に位置するギーラーンは、カスピ海に連なる低地からターレシュ／アルボルズ山系のうちに、ほとんど一年中豊かな草木の緑を見る。乾燥炎暑の地が大部分を占めるイランにあっては別様のその湿潤温暖な自然環境は、もうひとつのイランとも言うべき風土色を育んでいる。もし日本人がそこを訪れたならば、広やかな稲田、茶畑あるいは夏季山峡の石清水や傍らのあずまやに、異郷に在ることをひととき忘れ、得も言われぬ安堵感をおぼえるにちがいないであろう⁽¹⁸⁾」
- ・「われわれがふつう思い浮かべるイランの風景、つまり、沙漠、オアシス、羊の群といったものは、乾燥したイラン高原のイメージである。ところが、セフィードルード川の回廊を抜けると、そこはまったく違う風景がある。青々とした水田、そして山裾には茶畑が広がり、山は木々で覆われている。また、点在する家々の屋根も三角屋根で、藁や瓦で葺いてある。年間を通じて湿潤で、ひじょうに緑豊かなギーラーンの農村は、一見すると日本のどこかの田園風景かとも見紛うほどである⁽¹⁹⁾」

日本人にとってそれは異郷における「異質性」ではなく「同質性」の認知、そして日本風土の再認識の基となるのである。イラン北部カスピ海沿岸域は、したがって二重の意味で考えさせられるところがあるが、これが如何様に多くの当該地実見の先人に伺い得るかは筆者の強い関心事でもあった。したがって同様の「体験記」を求め、吉田正春ら明治期ベルシア使節団の記録他これまでそれらいくつかを集成したことがある。そのうち、例えばかつて京都大学人文科学研究所「中近東調査研究部」（隊長、吉田光邦）によるイラン現地調査に参加した生物学専攻学生（当時）の東滋が著した、1956年9月18～26日のテヘランからアルボルズ山脈を越えてのカスピ海南岸行レポート中には次のような描述を見る事が出来る（掲載書目次表題「マザンデラン方面」）：

- ・「眼下にひろがるサフィド・ルード（＝セフィードルード川、引用者註）の谷は、褐色の布のようだ。流れにそう低地は一めんの稲田。夜来の雨に露をふくんだ草むら。雲と緑の山を映す水たまりの山道に立てば、だれしも日本の山村を思い出すだろう。眼前の風景は僕の脳裏にあって美濃の山奥の峠道と交錯する。小谷ぞいに開かれた階段状の水田、黒い木立ちを背にしたわら屋根の村。そして道傍のこわれた小屋は粗末なこけらぶきだ。⁽²⁰⁾」

あわせて興味深いことは、カスピ海南岸域において感受される、イラン（あるいは西アジア）他所とは明らかに異なる風土状況からのこの印象は日本人に限ったことではなく、西欧人にとっても印象強いらしいと思われることである。たとえば1892年にこの地方を訪れたかのガートルード・ベル（Gertrude Lowthian Bell, 1868～1926年）は、カスピ海南岸域風土の特異性にいたく傾注している具合を次のように綴っている：

- ・「私どもはルードバルという小さな集落（訳者註省略）を通り過ぎた。川（＝セフィー

ドルード川、引用者註)のほとりにあって、豊かなオリーブの木立ちにかこまれたところだった。(中略)そして実りゆたかなギーラーン(訳者註省略)へ飛びこんで行った。ああ、いたるところ苔と羊齒類^{しだ}に被われた、こころよい森の小道、木の葉の湿りを帯びた甘い匂い、絡みあった枝を通ってくる穏やかな陽光、そしてはねかえる水の音!目を上げれば、見えるのはセフィード・ルードと、その向こうにさらに、そしてまだまだつづく森林のみだった。(中略)ぬかるんだ道路がラシュト(訳者註省略)とカスピ海へ続いていた。

(中略)道の両側は、ところどころに藺草^{いぐさ}で埋まった沼のある稠密な植生が壁をなし、あちこちに残る小さな空閑地が押し寄せる密林をкаろうじて食いとめていた。⁽²¹⁾」

また、秘密諜報員としてその名を知られるロナルド・シンクレア(Ronald Snclair, =レジェナルド・ティーゲージョーンズ Reginald Teague-Jones 1889~1988年)は、1926年冬~春季、「イランとの交易の可能性を探るという、英国商務省の依頼を受けてのものだった⁽²²⁾」といわれるその自動車旅行において、タブリーズ、マンジール方面よりこの地を経由した際の模様をたとえば次のように記している:

・「雨が熱帯の豪雨のように降り続くなかを、私たちはひどいぬかるみの凸凹道を泥水をはね上げながら進んだ。やっとラシュトに到着した時はすでにずいぶん遅い時間になっていて、(中略)翌朝雨はやんでいたが、空には相変わらず厚い雲がたれ込め、濃い霧のせいでよけい陰気だった。時間がたつにつれてやや霧が晴れ、水田を耕すバッファローと、女たちが体を半分に折って稲の苗を植えているのが見えた。光景全体がビルマかセイロン—あるいは東洋ならほとんどどこでもいいのだが—を思い起こさせた。今通ってきた青々とした雨林に続くにはふさわしい景色だと思えた⁽²³⁾」

このように、いくらかでも西アジアの気候風土について体験し得た者、あるいは知識として既知の者ならばカスピ海南岸域の気候・風土は、自国とのあるいはイラン(ペルシア)他所との相違・相似具合から強い関心事となる。カスピ海南岸域からそのペルシア体験を開始した大庭柯公の場合、したがって、そこに異郷として当然の異質性と共に、日本および東アジア諸地との類似・同質性をはからずも観察・体験し得たのである。

まとめにかえて

大庭柯公がペルシア入りした1910(明治43)年の前後当時は「イラン立憲革命」のまさに混乱期にあたる。オスマン、エジプトと相並ぶ西アジアの大国のひとつペルシアの国内動静よりは、その対英・対露等外交関係情勢への関心事と相俟って、当時、日本国内発刊の新聞にはかなりこまかな報道記事の頻出を観ることができる。大庭柯公の、「波斯は必しも邦人未踏の地ならざるも而も未知の國と言ひ得べし(傍点省略、引用者註)、僅に其一端を見舞ひ、僅に其一角を踏み

たるの邦人すら未だ三四人を出でず、邦人の波斯に關する智識の極めて幼稚なる知るべきのみ」(176頁、前出)という認識ながらではある。したがって大庭柯公の職業・立場上から推して、ペルシアについてはかなりの知識が事前に用意され、したがって、「波斯遊記」におけるペルシア對外情勢、經濟、内政に関わる記述には力が入り細やかとなっていることはじゅうぶんに首肯されるところである。

対して、自然・風土に関しては、前記諸引用に見られるごとく、それなりの事項は有るにせよ、「波斯遊記」内ではやはり従たる扱いになっている感是否めない。これは、当然ながら「大庭柯公の職業・立場」のなせるところではあろうが、ロシア経由でカスピ海港市に到ったというペルシア入国経路も原因しているのではなかろうか。大庭柯公はギーラーンの湿潤環境をペルシア第一印象と受け止め、爾後、こんにちのマーザンダーラーン、ゴルガン方面すなわちいずれもカスピ海南岸域に在ってギーラーン同様の自然環境、自国（日本）との相似具合をのみ体感して、ペルシア国内を東進したこととなっている。

大庭柯公の「波斯遊記」は、天然・自然に対する確かな注視に加え、人への強い関心をもちろん怠ってはいない。例えば、テヘランでの《婦人の身なり》(220頁)やマーザンダーラーンでの《高い背丈と美貌》(249頁)といった、異文化を表徴するかのような婦人の外形的風貌を観察しつつ、「波斯の婦人」章における「一夫多婦制」、「波斯の宗教界」章における「短期妻」等々を嘆かわしく捉えているばかりではない。「曾て大寺院參詣鐵道の延長六哩の敷設を見たりし時に於いて、鐵道敷設反對運動のために二千人餘の婦人は宮城前の廣場に群集して新築停車場を破壊したり、(後略)」(230頁)、「近時婦人の街上を行くもの夫の在らざるを利して時々その面布を脱し、他の男子に會釋し微笑と秋波を途上の男子に投ぐるものあるを見るといふ」(232頁)、「波斯在留の外國宣教師間には早くより婦人覆面の舊俗を破棄することの唱道せらるゝあり」(232頁)等々の事、すなわち近時の実情・現実より推して、既述のごとく達観したところがある。

近時の実情・現実という点においては、「波斯の官省内の執務」(233頁)、すなわち《刀筆之吏の執務風景》(234頁)や《「寺院内の學校」》(239頁)あるいは《新聞社編集室》(236頁)等々において観察し得たペルシアの停滞・遅延性にはかなり批判的ではある。

「(遊記終)」(252頁)、すなわち、バルフエルーシ市出立(10月4日)後、同日、メシエジセル港(中央アジアへ向けてのペルシア出国処)到着をもってこの「波斯遊記」は終わる。これに続く「波斯の交通と列強」(252～267頁)には「(明治四十四年一月「外交時報」所載)」(252頁)との付記があることから、おそらく『南北四萬哩』発刊に先んじて著されたものの再録と考えられる。もっとも、大庭柯公の帰国が明治43年10月であることより推して、「波斯の交通と列強」中に記された「(一)鐵道及交通路」(252～258頁)、「(二)獨露の成敗」(258～263頁)、「(三)兵力と列強關係」(263～267頁)等々は、当時のペルシア国勢、ペルシアを取巻く國際關係について「ジャーナリスト」(前出、註(2))としての面目躍如、まさに速報ということになる。

『南北四萬哩』はその発刊後直ちに、あるいはあまり日を置くことなく、新聞紙上に紹介文の

掲載を見る⁽²⁴⁾：

①「南に印度洋を過ぎたるの著者は北に裏海を渡れり。喜望峯角にセシルローズを追慕したるの著者は中亞のサマルカンドに帖木兒（＝チムール、引用者註）の墓を弔せり。新世界としては南米の三國を詳述し、舊世界としては英露獨土の逐鹿傷たる波斯を細記す正に是れ世界的風土記にして世界的人國記なり。若し夫れ南にインド洋面の風物を説き北に露清の邊境を論ずるに至りては亦是れ北守南進、南守北進二大論の暗示的解決なり。

②「○南北四萬里（大庭柯公著） 大庭柯公氏が大阪毎日の社命により昨年軍艦生駒に乗じて南米より歐洲に入り中央亞細亞を過ぎて歸れる長途旅行の視察記なり普通の旅行記とは趣を異にし一流の筆法を以て縦に其の見る所を叙す深くは非ざれどさらゝとして拘はらぬ處が可し珍らしくもあらざる見聞を宛珍らしさうに書き立つるの月並を脱せるは流石に新聞記者なりとにかく面白く讀過せらるべし雪嶺博士の序文あり」

また、この書は発刊当時好評を博したのであろうか、略四ヶ月後には紙上に「再版」の文字が「是れ列強開發の新天地たる波斯及び中央亞細亞を踏破し研究し論斷せるもの」⁽²⁵⁾ほかの宣伝文句と共に見出される。

大庭柯公によるこの外遊記は20世紀初頭、中東を翻弄する欧米列強の様態を「言論人」が実際に現地取材し、衰退・混乱下のカージャール朝ペルシアおよびオスマントルコの末期国情や、ロシアの「南下政策」のもたらす緊張情勢を速報・分析していることにおいて、こんにちの中東諸問題を原点回帰して考察するうえでも貴重視できるにちがひなく、専門分野からの読解によるさらなる真価発揮が期待し得ると考えたい。

（引用文等において、旧字、新字、および異体字等を敢えて混用したところがあること、「合略仮名」を現代仮名遣いにあらためたこと、また、固有名詞のカタカナ表記については、不統一に引用箇所「ママ」としたところがあることをお断りしたい。）

註

- (1) 大津忠彦 2007「明治期先覚者吉田正春とその事績―「考古学」および「西アジア」の視点より―」『人間文化研究所年報』第18号 筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部人間文化研究所 157-169頁。
- 大津忠彦 2011「明治期遣波使節団員古川宣誉のペルシア体認とその背景」『人間文化研究所年報』第22号 筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部人間文化研究所 223-235頁。
- 大津忠彦 2013「明治期遣波使節団員古川宣誉の観たペルシアのフローラ」『人間文化研究所年報』第24号 筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部人間文化研究所 183-195頁。
- 大津忠彦 2015「明治期家永豊吉のペルシア行とその自然観察」『人間文化研究所年報』第26号 筑

- (2) 『コンサイス 日本人名事典 改訂新版』(1993年、三省堂)「大庭柯公」の項
- (3) 今日の Bandar-e Anzali
- (4) Pīr Bāzār (あるいは Pīleh Bāzār)
- (5) Resht (あるいは Rast)
- (6) たとえば209頁の桑畑、菜園、米田、烟草畑、巨木樹林の観察記録
- (7) Manjil (あるいは Manjil, Menjil)。強風で知られる：「メンヂリの強風は地理學上有名なるものなり」(211頁)
- (8) ペルシア語で「モフル」と称される礼拝時使用品。「其小片は回教の聖地メッカの土にて練り上げたる土片にして」(216頁)との説明文が続く。
- (9) Aqa Baba (あるいは Āqā Bābā, Aga-Baba)
- (10) Qazvin (あるいは Qazvīn, Caspin, Qazwin, Ghazvin)
- (11) 建物外壁に見られる施釉タイル、とくにイラン特有の「モザイク・タイル」装飾のこと
- (12) 「チャドル」や「ニカーブ」等のムスリム女性がまとう覆い物
- (13) 挿図等に拠れば、今日の Babol Sar (あるいは Babolsar, Bābolsar, Bābul Sar)、すなわち革命前旧称 Mashhad-i-sar (あるいは Mashhadsar, Mashhad-i-Sar, Meshed-i-Sar) を指すと思われる。
- (14) Amol (あるいは Āmol, Amul)
- (15) 今日のバーボル (Babol あるいは Bābol)。旧称 Bārforush。所在場所等について、「アムーリ市より裏海岸へ至る途上三十五露里の地點に在り、この市東北波斯に於ける綿花の集散地(後略)」(250頁)とある。ちなみに、「露里」は旧ロシアの長さ単位「ベルスタ」の意であり、1ベルスタ(露里) = 約1066.8メートルとされる。cf. 「八十露里(約我二十里)」(210頁)、「二十一露里(約我五里)」(251頁)
- (16) アムーリ市 (= Amol) と同様の意。「バブーリ河」は Babol rud (バーボル川) の意と思われる。
- (17) 予備調査前後を含め本調査についての目的・経緯・成果、およびそれらに関わる概報ならびに最終報告書等公刊物については、例えば次記拙文に一括紹介している：大津忠彦2006「日本・イラン共同考古学調査研究事業—経緯と研究環境上の諸問題—」『論叢』第17号 筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部国際文化研究所 141-152頁。
- (18) 大津忠彦 1998(財)中近東文化センター『ギーラーン 緑なすもう一つのイラン』所収4頁
- (19) 山内和也 1998(財)中近東文化センター『ギーラーン 緑なすもう一つのイラン』所収9頁
- (20) 吉田光邦編著 1957『沙漠と高原の国—イラン調査旅行の記録—』三一書房 187-188頁。なお、同書188頁には「みどりに包まれたワラブキ屋根は日本の農家を思わせる」とのキャプションの付された写真の掲載がある。
- (21) ガートルード・L.ベル著、田隅恒生訳 2000『ペルシアの情景』法政大学出版局 127-128頁
- (22) ロナルド・シンクレア著、山村宜子訳 1990『ペルシア冒険紀行』心交社 310頁
- (23) 註22 153頁

- (24) ①1911〔明治44〕年6月16日発行『朝日新聞』（東京版、朝刊）；②1911〔明治44〕年6月28日発行『朝日新聞』（東京版、朝刊）
- (25) 1911〔明治44〕年10月6日発行『朝日新聞』（東京版、朝刊）

（おおつ ただひこ：アジア文化学科 教授）

明治期大庭柯公のペルシア北部紀行

大 津 忠 彦

Observation of Northern Persia by the Journalist
Ohba Kakoh in the Meiji Era

Tadahiko OHTSU

筑紫女学園大学
人 間 文 化 研 究 所 年 報
第27号
2016年

ANNUAL REPORT
of
THE HUMANITIES RESEARCH INSTITUTE
Chikushi Jogakuen University
No. 27
2016